

3. 縄文人や弥生人はどのように形成されたか（予報） — 韓半島の古人骨の調査から —

藤田尚（新潟県立看護大学）

現在まで、韓国の古人骨研究でまとまったものは、日本の古墳時代初期に相当する礼安里人骨と弥生時代中期に相当する靑島貝塚人骨の報告がある。筆者は、靑島人骨の鑑定に平成15年度から取り組み、平成16年度からは科学研究費補助金を取得して、調査を継続した。靑島人骨群は、礼安里人骨の時代をさかのぼること約400年-700年余り。日本の弥生時代の中期初頭に相当し、しかも極めて保存状態が良好な個体が存在する。また、結核の起源など、渡来人によって日本に持ちこまれた疾病を解き明かすことは、昨今の古病理学の大きな課題であり、日本、韓国を始めとする、東アジアの疾病史の研究においても、非常に価値が高いものと思量された。

以上のような観点から、平成16年度より、基盤研究（C）「韓国靑島出土人骨に関する形質人類学的研究」、さらに平成21年度からは基盤研究（C）「韓国出土古人骨の形質人類学的研究」を取得し、韓国南部の人骨の形質や古病理学的分析を進めてきた。

本発表では、靑島人骨および煙臺島人骨（BP. 6000年の年代が名古屋大学から与えられている）の頭蓋の形態を中心に考察する。

靑島遺跡からは、日本の弥生土器（須玖Ⅰ式、Ⅱ式土器など）が多数出土し、恐らくは、日本の土器が搬入されたのではなく、「日本人が移住していた」と考えられる。また、楽浪のBC1世紀ごろの土器が出土するほか、晋と前漢の貨幣が出土している。また、断面三角形粘土帯土器＝靑島式土器は、北部九州から近畿地方まで広く分布するとのことであり、このことから、当時の日本と韓国の深い交流が伺われる。

靑島人骨の形質は、概ね北部九州・山口県地方から出土する「渡来系弥生人」に類似する。共同研究者である、韓国慶南考古学研究所長の崔氏によれば、いわゆる”韓国人“と日本人（日本からの移住者）“と”両者の混血“の三者の人骨が出土したのではないかということである。保存状態の良好な頭蓋骨をいくつか観察すると、鼻根部から頭頂にかけての高さがあることと、顔幅が概して狭く、北部九州・山口県地方の渡来系弥生人よりも、面長な印象を受ける。また、韓国礼安里人骨と比べても、その印象は異なる。

靑島人骨に関しては、まだ今後の精査が必要であり、軽々に結論を出すべきではない。しかし、日本の縄文時代人とは、根本的に異なった形質を持っているとあって良く、前述の通り、北部九州・山口県地方の渡来系弥生人により類似する傾向を持つとあって間違いではないと思われる、しかし、文化的には、人骨は、風葬された状態で出土しており、この風習は、ロシアおよび中国方面からの影響であると考えられている。その点でも、北部九州の甕棺葬とは異なる。

一方の、韓国煙臺島人骨は、慶尚南道統営群の小島に形成された貝塚から発掘された。時期的には、BP6,000年ほどの年代が与えられ、韓国の新石器時代人骨として、貴重な資料である。本人骨については、小片丘彦らの報告があるが、演者らは、平成21年度に、科研費によって国立晋州博物館所蔵の同人骨を再調査した。小片らの調査から年月が経たせいか、国立晋州博物館に所蔵が確認された人骨は、3-4個体に留まった。その中で小片らも報告しているが、5号人骨と命名された人骨の頭蓋骨が計測に堪えうるものであった。小片らは、

5号人骨を女性と推定したが、今回訪韓したメンバーでは、同個体を男性とするか女性とするかで意見が分かれた。5号人骨の性別判定には、なお慎重であるべきかと思うが、発掘時点により近い状態で観察をした小片らの判断を尊重し、本発表では、女性人骨として扱う。比較の方法としては、1例のみのデータであるから、多変量解析には無理があると判断し、少し古典的ではあるが、偏差折線によって、日本の縄文時代人、渡来系弥生時代人、韓国靺鞨人骨との比較を行った。

5号人骨は、頭蓋最大長、頭蓋最大幅ともに縄文時代人よりも大きいが、Cranial Indexは80.4となり、短頭の下限に入る。また、上顔高は縄文人よりも低く、いわゆる寸詰まり的な印象を受けることも日本の縄文人に類似しているといえる。また、下顎のオトガイ高が比較的低いことも類似した傾向の一つとみなせるであろう。一方、バジオンーブレグマ高が高い、眼窩高が高い、鼻幅や下顎角幅、下顎体厚の値は大きく、これは後の渡来系弥生時代人といわれる土井ヶ浜人骨や金隈人骨などにみられる特徴を有している。

以上のことから、BC4,000年頃には、日本の縄文時代人と類似した傾向の人々が朝鮮半島に存在していたと考えられる一方、その人々は、朝鮮半島から弥生時代に日本に入ってきたとされる渡来系弥生時代人の形質の一部を既に保持していたと考えられる。